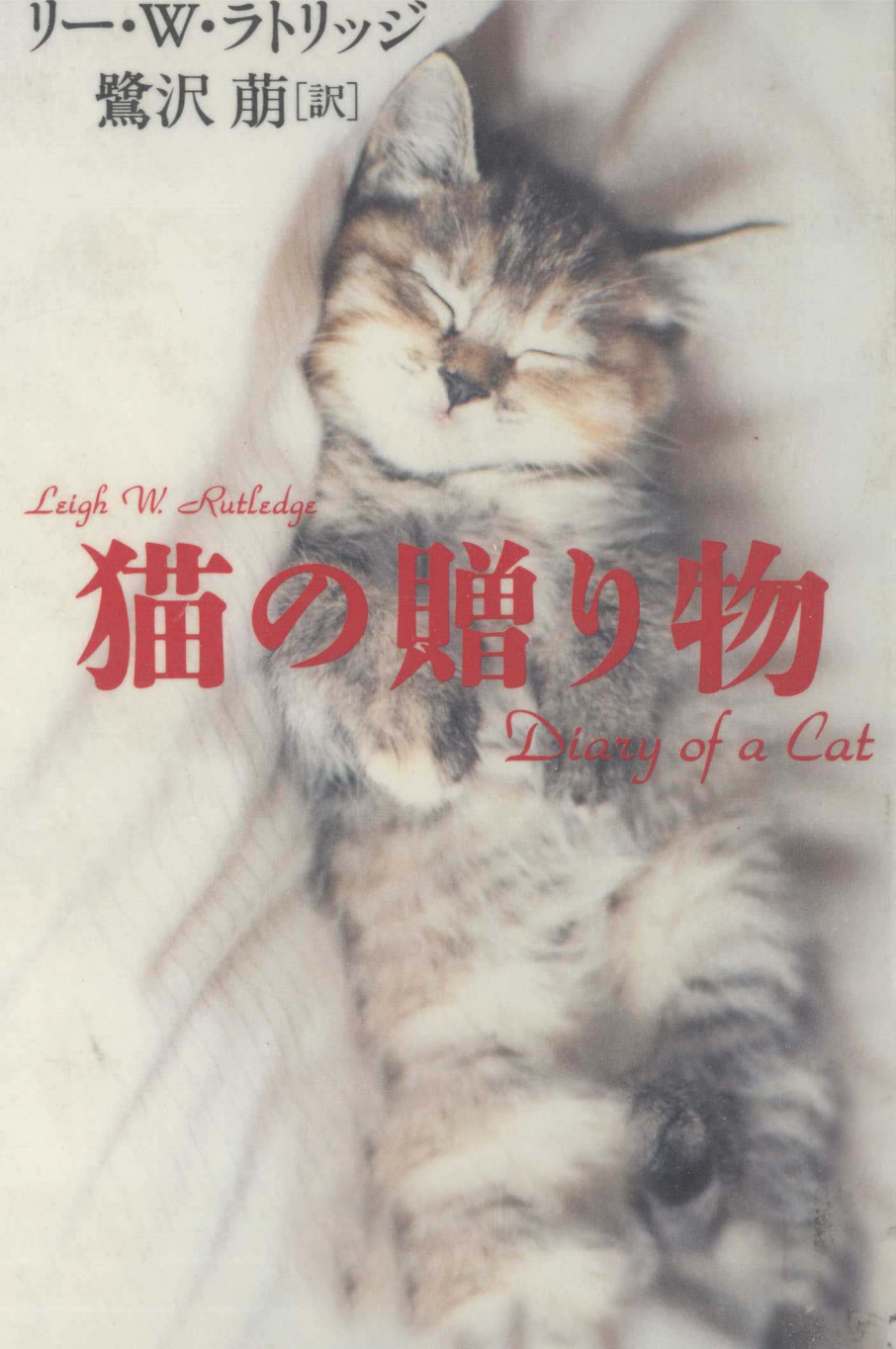
リー・W・ラトリッジ
鷺沢 萠[訳]



Leigh W. Rutledge

猫の贈り物

Diary of a Cat

鷺沢 萠[訳]

Leigh W. Sales

猫の贈り物

Diary of a Cat

江苏工业学院图书馆
藏书章

猫の贈り物
1997年6月20日　第1刷発行

著者――リー W. ラトリッジ
訳者――鷺沢　萠
© Megumu Sagisawa 1997, Printed in Japan
発行者――野間佐和子
発行所――株式会社講談社
〒112-01 東京都文京区音羽2-12-21

出版部 03-5395-3504
販売部 03-5395-3622
製作部 03-5395-3615
印刷所――株式会社精興社
製本所――島田製本株式会社
定価はカバーに表示してあります。

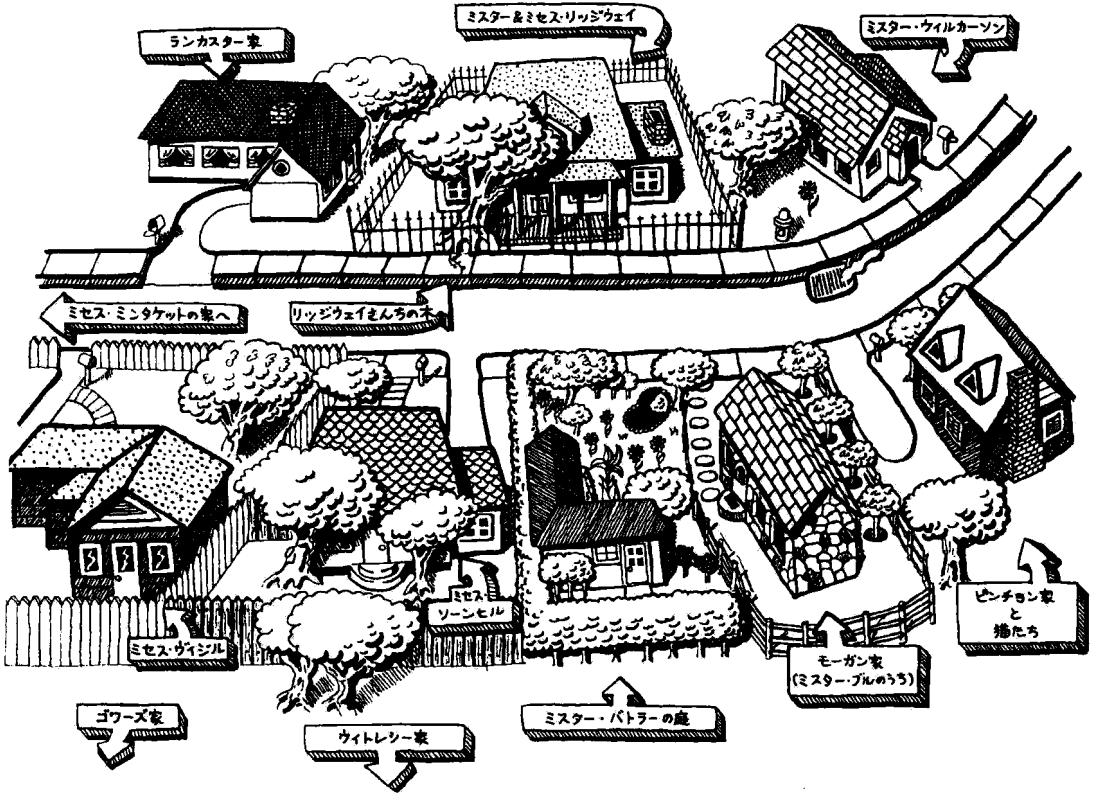
本書の無断複写（コピー）は
著作権法上での例外を除き，禁じられています。
落丁本・乱丁本は小社書籍製作部宛てにお送りください。
送料小社負担にてお取替えいたします。
なお，この本についてのお問い合わせは
文芸図書第一出版部宛てにお願いいたします。

ISBN4-06-208141-5（文一）

猫の贈り物

装丁　川上成夫

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.


ランカスター家
ミスター&ミセス・リッジウェイ
ミスター・ウィルカーソン
ミセス・ミンタケットの家へ
リッジウェイさんちの木
ミセス・ヴィジル
ミセス・ソーンヒル
モーガン家
(ミスター・ブルのうち)
ピンチョン家
と
猫たち
ゴワーズ家
ウィトレシー家
ミスター・バトラーの庭

両親に捧げる。

年をとるにつれ判ってきたことだが、たくさんの種子(たね)をまいてくれたのはあなたたちだった。

夏

6月25日

寝た。

6月26日

寝た。

6月27日

今日は壁に登った。ミセス・ヴィジルがバスルームの壁紙を新しくしたのだ。クッショ

ンの入った壁紙である。こたえられない。ふさふさのネズミの毛皮にツメを立ててるような感じだ。

夕方になってぶらぶらとご近所めぐりをした。ミセス・ヴィがスーパーで買ってきたものを家に運びいれてるあいだに、サッと素早く逃げ出したのだ。ミセス・ヴィの両足首のあいだを駆け抜けていったら彼女はよろけてしまい、買ってきたトイレットペーパーのロールを玄関ポーチのそこいら中にぶちまけていた。

「このバカ猫……」

ミセス・ヴィは怒ってそう言い、ドアを乱暴に閉めた。だがその直後に（罪の意識にかられたのであろうことは間違いない）ふたたび表に出てきて、名を呼びながら唇でチュッチュと音を出す。ぼくは植え込みのかげから、彼女がどんどんエスカレートしていく様子を逐一観察していたのだが、最後にはミセス・ヴィもあきらめたようでやがてドアは閉められた。

通りはカップルや子どもであふれていた。暖かい夕方の風の中を人々がそぞろ歩いている。通りに出たとたん、小さな男の子が、ぼくのほうへ向かって物凄い勢いで三輪車を漕ぎはじめた。ぴょんと飛びのいたのだが、時すでに遅し。三輪車は縁石にぶちあたり、男

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

の子は大声でギャーギャー泣きはじめた。
隣家のミセス・ソーンヒルは、十代の娘と前庭で口ゲンカをしているところだった。
「あんたは超能力者なんかじゃないわ」
芝生の中からタンポポをむしり取りながらミセス・ソーは叫んでいた。
「でもホントにあたしは超能力者なのよ。それはママにだってどうしようもできないことだわ」
娘が叫び返す。
「あんたが誰かのことを考えてたときにちょうどその人から電話がかかってきたからって、あんたが超能力者だなんてことにはならないのよ。いつでも、それから誰にでも、似たようなことは起こるものなの」
「ママはヤキモチ焼いてるんだわ。あたしは超能力者だけど、ママはそうじゃないから！」
娘は哮えた。
ミスター・バトラーのところの花壇に長いこと坐っていた。虫を眺め、マリゴールドや千鳥草の匂いを嗅いだ。大きな青いトンボが鼻の上にとまろうとしたが、やがてトンボの

ほうでぼくが石っころではないということに気付いた。眠くって、トンボを追いかけまわすのは無理だった。結局、日が沈むころに家に帰った。

玄関前の階段にぴょんと飛び乗ると、ミセス・ヴィはカーテンのむこうからこちらを覗きこんでいた。彼女はだぶだぶの赤いキモノを着たまま私に襲いかかると、まるで何日も会っていなかったかのようにぼくを両腕の中に抱きかかえた。

「おーよしよし、帰ってきたのね」

彼女は叫んだ。椅子に坐ったまま、ずーっとイライラしながらぼくの帰りを待っていたに違いない。

ミセス・ヴィはおいしいミルクをボウルに一杯くれた。そのあと、ふたりしてテレビの前で眠りに落ちた。

6月29日

今日は毛玉がふたつ。

7月1日

ペトラおばさんがクリーブランドからやって来た。ペトラおばさんというのは、ミセス・ヴィのお姉さんである。家に入ってきて二分もすると、彼女はぼくのほうへ襲いかかってきて太い両の腕をがばっと広げた。私はソファの下に駆けこんだ。そこならおばさんの手も届かない。

「あらん、ニャンコちゃんたらどうしてあたしから逃げるのかしら」

ペトラおばさんは不満げに鼻を鳴らして言うが、どうしてって訊かれても……。おばさんの吐く息は歯ミガキ粉とパストラミとウオッカの匂いがするのである。猫同士の挨拶のやり方を、人間は見たことがないのだろうか？　あの礼儀正しいクンクンという嗅ぎあいを？　猫というものはおしなべて、どんな付き合いだろうが付き合いをはじめる前に、互いの鼻をこすりあわせるものなのである。だが人間は眼前で息を吐きかけ、抱きかかえるときにこちらの目を焼く。大事なのは「息を吸うこと」であって「息を吐くこと」では断

じてない。それが猫の心をつかむコツだ。

ソファの下から、おばさんの太った足首が見えた。ぼくが出てくるのをソワソワして待っている。そのためにおばさんはあらゆるものを使った。プラスティックのボール、猫じゃらし、目の前で前後に振られる履き古しの靴下。おばさんはあっちへ行ったりこっちへ行ったりしていたが、やがてぼくに到達するまでの戦略進路を偵察するかのようにソファの後ろ側にまわりこんだ。何分かしてやっとあきらめた彼女が、ミセス・ヴィにこうボヤくのが聞こえた。

「あんたの猫って、すんごくヘン……」

たいていの人間は、動物に拒まれたときに奇妙にも絶望を感じる。彼らは動物や小さな子ども、それからトランプのカード、株価などといったものが自分に対してどのような反応を見せてくれるか、ということに、自らのプライドをかなり大量に賭けてきたようである。

ペトラおばさんから逃れるために、午後いっぱいをソファの下に引きこもったまま過ごした。

7月2日

今日は車のルーフの上で寝た。近所の犬にからんだ。それから車のルーフの上でまた寝た。

ミセス・ミンタケットが散歩に出ていた。ミセス・ミンタケットは一ブロック離れたところに住んでいる七十代のご婦人で、ここ二十年近くも家から外に出ていないといわれている。だが最近、彼女は自分のテリトリーを広げようという努力をしているのだ。気の毒にも彼女は我が家の真ん前でストップをかけられていた。歩道に敷かれたコンクリートの石たった一枚ぶんの長さでいいから、もうちょっと前に進むようにと彼女は自らの両足に説得を続けていたが、その野望の大きさに反して両足にはヤル気がほとんどなかったのである。

「あともうちょっとだけ進みましょうよ」

脅えた子どもをあやしてでもいるように、ミセス・ミンタケットは自分の履いている靴に向かって言った。

「あとほんの二、三歩だけ。そしたらお家に帰りましょ」
待ったあげく彼女は短く靴を睨みつけたが、靴からの反応はありそうにもない。
「よくお聞き」
とうとうミセス・ミンタケットは声を荒げた。
「あんたたちはあたしに、見飽きた町並みと見飽きた家々と見飽きた道をただただ見つめて、残されたこんなに短い時間を過ごせって言うの!? あたしには死ぬ前に行っときたいところや死ぬ前に見ときたいものがあるのよ!」
だが彼女の靴は身じろぎする様子も見せなかった。結局ミセス・ミンタケットはあきらめの溜息をつき、そうしてくるりと背中を向けた。
「明日にはきっと、ね……」
彼女はそう言い、足を引きずりながら帰っていった。

7月4日

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.